

〈農業〉以上の様な土地利用の人文的背景としての農業の概観を述べると、まず農家の経営規模は佐倉 9.2 反、根郷 1.05 町であり、専業兼業の割合は佐倉専業 55%、兼業 45%、根郷専業 46%、兼業 54% でこの二地区にいくらかの地域差が認められる。どの農家も水田と畑を所有しているが、収入から見ると水稲に多く依存している農家が多い。経営はあまり多角的とは云え、一般に家畜の飼養率は低い。しかし最近二、三の部落で乳牛の飼育が盛んになり始めた事、養豚が急速に普及しつゝある事などが挙げられる。千葉県各地に見られる東京への農家婦人の日帰り行商はこの地域にも見られ農家の現金収入源となっており、蔬菜栽培も自給以外に行商用としてだけは小規模多角的に行われているがこれは単一栽培共同出荷などを妨げるものとなっている。

最近、田地造成、工場誘致、ゴルフ場設置等都市化の動きがこの地域にも見え始め、農業経営の合理化の要請と共に、城下町の昔からのこの地域の停滞的な歩みが、内外からゆすぶられ、急速に変えられつゝあるのが現在の姿であるといえるであろう。

近効酪農の地理的考察

— 千葉県八千代町の場合 —

大野敬子

東京から 40 キロに位置する八千代町について報告する方法として「酪農業が他の地域現象といかに結び付いているか」を考察の中心点に選び地域性の把握を試みた。

千葉県八千代町は旧 3 町村が合併してできたもので、今日でも 3 地区はやや性格を異とする。特に南部の大和田は京成電鉄大和田駅があり、他 2 区に比し純農村的性格が少なくなっている。田地造成が急激に進んだ八千代台も八千代町の一部で、当地域が東京の近郊として大東京の影響を受けていることをはつきり示している。

当地域は下総台地の北西部にあり、地形はほぼ平坦で広く拡がる洪積台地とその間を刻む沖積低地とから成る。基盤は成田層であるが、台地上は関東ローム層が液い畑作物の基本条件になっている。調査の結果ローム層の違いによって台地は高、中、低の 3 面に分類できた。その鍵となつたのはチヨコレート色層・浮石層・水成ローム層である。沖積低地も比較的古いものと新しいものに分けた。その他、谷頭礫層面、崖下礫層面、斜面及び湖面相拓面の地形面を設けて地形分類した。

この地域を規定する基本的環境条件は台地地形と東京の存在と云うことができよう。

酪農業は、乳牛飼養農家が約190戸、普及率は10%程度で千葉県南部諸村の80%以上に較ぶるとかなり低いが、乳用牛の頭数は1700頭以上に達し、農村地域での頭数としては全国一と云われている。即ち多頭飼育に特色がある。そしてこれ等の牛は殆んど牧場のない全飼いをされている。酪農家の分布は大和田地区に偏在している。

当地の酪農家は「専業」「準専」「酪農」と3つに分けて呼ばれており、飼養の仕方が異っている。これには乳業資本の乳価の単価が乳量によって差があることが大きく影響しており、いわゆる買い叩きとは云えないまでも、「酪農乳価」はかなり低くなっている。

「専業」は1日の乳量が常に1石以上のもので大体15頭以上の飼養がなされている。20—30頭が典型的で、180頭を有す会社組織のものが当地の最大である。大きなものは殆んど昭和初期に東京から移動して来た搾乳業者が成功したものであり、大乳業と特約関係を結んでいるものが多い。飼料費をたくさん使って濃厚飼料を異常に与えること、牛の入れ換えが激しいことが特色となっている。

「酪農」は一般農業も行ないつつ乳牛も飼っているもので5、6頭以下が多く、飼料費は専業に比してかなり少なくなる。頭数によって主畜農業的と有畜農業的と別けられよう。後者は今後の日本農業の進む方向の一つと云われ奨励されているが、当地に関するかぎり今日の条件では伸びることは期待できないようである。即ち当地のそれは酪農理論の様には一般農業と乳牛飼養が結びついていず乳牛が農業主体におぶさっている危険性があり、現に1、2頭飼いが減つて来ている事実は注目される。

「準専」は地元のK乳業が乳量確保のために育成策をとっているため生まれたもので、「酪農」から「専業」への橋渡しの存在であり、数は少ない。

この様に種々のタイプが非常に狭い1つの町に存在していることは未だ十分に適合していない日本の酪農の姿を示めしていると云えよう。各々とも問題を含みながら一応存続しているのである。

酪農と一般農業との関係は大きな問題であるが、これに関する調査は不十分であった。前述した3地区の差から統計上で掴めるだろうと考えたが明確なものとはわからなかった。梨栽培は乳牛飼養と共存しないこと、規模の大きくない蔬菜出荷は着しい労力のピークがないため飼料との関係も加わって米麦よりも共存する傾向にあること、は云えよう。

主として戦後牛を飼い始めた農家が、東関東的なやや遅れた農業経営の上
に全く異質の乳牛を置いた形ではあるが、存続し、地域に影響を与えて来て
いる。町全体としての農業は主穀、雑穀が中心で一般の近郊農村の概念から
はずれるが、八千代町が宅地化の進行で代表される近郊に位置していること
も事実であり、酪農は地域の一現象として地域性のいろいろな面を示めて
いるのである。

以上、まとまりのないものになってしまったが要約である。

やる気になってアクセルを踏み過ぎたきらいがあった時、急ブレーキをか
けてそのまましばらく進行を中止した時があったが、今さらそうしたむら気
や、その要因となった力不足、努力不足をとやかく云っても仕方あるまい。
感想はいろいろあるが、予想以上に私にとっては勉強になったということ
を含まれよう。調査中行なっていることの位置付けがなされなかったことは失
策であったと思う。

犀川丘陵東南部の地形と土地利用

—麻績盆地を中心として—

小川道子

曲りなりにも書いた卒業論文であるが、単なる土地利用の報告になつてし
まった。しかし、調査の目的は、山間盆地の主な土地利用である農業土地利
用の現状を知り、それを基礎とする生活がいかなるものか理解することであ
ったが、山村の生活は、調査しているうちに、わずかにのぞいたのみであつ
た。

選んだ地域は、長野県東筑摩郡麻績村という山間の盆地である。本地域は
才三紀層から成り、地上りが顕著する地として有名な犀川丘陵の南部に位置
する。

調査地域の地形は、大部分を占める南面斜面と、わずかの北面斜面と、唯
一の平坦地である長細い河岸段丘とから成る。傾斜地といつても、本地域は
幸いにも、比較的緩いのである。この広い斜面が、集落、農業、交通などの
重要な舞台になっているので、調査の問題点も、傾斜地の土地利用というこ
とにしぼった。

傾斜という因子に関しては、本丘陵内のどの地域よりも興味の少ない所であ
るが、才三紀層、南向き、地下水、比較的冷涼な気候などの自然の因子に加
えて、交通位置、歴史的背景、そして、本地域の農民の意欲などが組み合わ
さって、本地域特有の土地利用形態を生み出している。